

六月十三日 つづき

十七時過清水建設大山氏来室。四方山話の後新宿へ。昨夜酔って財布を失くしたと思われる台湾料理屋、屋台へ再び行く。我ながら失くしモノには執念深い。勿論失くした財布は出てくるわけもないが、ビールを飲んでる内に二日酔は消えた。酒で参った体は酒で直すのが一番なのか。これではただの酔払いではないか。本当馬鹿者だ。

六月十四日

朝九時前地下へ下りたら誰もいない。今日は皆出払っているらしい。

六月十五日

スタジオボイス取材で神戸、アートガーデンへ。三〇年程も昔毛綱に教えられた場所で、連載最終回で再訪した。昨日から室内連載の下調べをするうちにビートルズのアビイロードを調べていた。アビイロードが一九六九年、アートガーデンのアポロ十一号月着陸記念碑、要するにアポロ十一号が一九六九年で、これも何かの因縁だろう。アートガーデンはすっかり廃園になっていた。緑に侵蝕され、人工物の命の短命さをことさらに思い知らされた。大石画伯の不思議な情熱によって生みだされた庭園であるが、ヴァン・ゴッホの碑、柳宗悦、ロマン・ロランの碑など全て苔むし、

崩れ始めていた。私的な遺跡について少し考えてみたい。グライターが言うように遺跡自体の持つメランコリアと建築的想像力の問題に関係性があるのは確かだろう。日本の場合それがかくの如く極めて私的な表れ方をする。その事について考えなくてはならない。二十二時東京に戻る。一日中眠たかったな今日は。スタジオ・ボイスの連載も今回が最終回で、中里和人さんと相談して、もう少し続行できるような方法を考えてみようという事になった。ゲートはぴくりともナポリから動かない。汽車でも飛行機でも車ですら、ひたすら眠いのだからどうしようもないのだ。

六月十六日 日曜日

朝室内原稿書く。夕方杉並渡辺邸オープンハウス。屋外デッキの水洗いをさせて、古材も洗わせてマア、ギリギリに間に合わせた。しかし、石山研の人数は多いな。

渡辺さんの家に関しては施主の人柄にも助けられて、自由な作り方ができた。これでセルフビルドの可能性も証明できるような気がする。昔、菅平の正橋君の鉄の家を十五年もかけて作ったのが夢の様だ。あれはマンツーマンだったからな。一人切りはどうしても凄絶になりやすいのだろう。

六月十七日

カンポジアから匂い草の種と覚しきがごっそり送られてきて、昨日屋上菜園にまいたが、時期的にはどうなのだろうか。しかしカンポジアは雨期乾期しか無いのだから、梅雨時の今にまくのが良いのじゃないかと思う。東南アジアの草を屋上に群生させるのは悪くないアイデアだと思うんだが。一人よがりだよなコレワ。

朝、朝山邸浜島邸打合わせ。安藤向井はゆっくり育てるつもり。

今日は竹橋の国立近代美術館で森正洋さんの展覧会のオープニングだ。毛綱の三〇年前の奇館異館の文章を読み直してみると当時二〇代の私は一個の独自な才能と遭遇していたのが良くわかる。死んでいなくなった人間のりんかくは時が経つにしたがってハッキリしてくるといのは本当だな。死者は生きている者がそれを忘れない限り生き続けるのだ。歴史というモノの本体はそれだろう。

中里和人とのセルフビルドの連載の延長戦に関する企画を作らねばならない。都市内農園のような事だろうな。

十四時竹橋の国立近代美術館へ。森正洋先生の「陶磁器デザインの革新」展。森先生にもお目にかかることができた。十七時世田谷へ帰る。

六月十八日

いかにも梅雨空で雨が降り続けている。

午前学部レクチャー。久し振りに松崎町のまちづくりの話をする。話しをしていて我ながら面白かった。自分が面白がれるのが何よりである。しかしながらアレは年相応な情熱が私の方にもたぎっていた頃の仕事だな。今だったら別のやり方でやっていたかも知れない。